

## コマンド・ガールズ 3

ケネス・ハートフォードの映画「HELL SQUAD」より



—— 冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。

ン連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、砂漠のあちこちで衝突していた。

テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そんな最中に起こった。

テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだったが、だが、悪が栄えた試しはない。

**世界最強の美女たちが、**

邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

## 登場人物

### ジャン

27歳。元CIA。身長174センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

### ティナ

25歳。いちばんの長身で180センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

### モーリーン

25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は178センチ

### リサ

20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

### ローレン

21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

### キャシー

18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちよつとだけソバカスが残る。1メートルを越える、いちばんの巨乳。



「二で、彼女たちはどこに？」

大使は、アラブ人たちが流した血や肉片を拭き取った後の床を見つめながら訊ねた。

「コンチネンタル・ホテルです」

ジャックは答えた。傍らに一人残ったジャンが訊ねた。

「連絡はあなたから？」

「いや、ぼくはこれから、パレスチナに飛ぶ。アラブの友人たちから情報を集めるためにね」

「では、指示は」

「大使館が出す」

大使は答え、それからジャンに食い入るように言った。

「頼むから……息子を助けてやってくれ。あいつは優秀で、中東の安定を心から願っていた。イスラム教徒の友人も多かった。そんな息子を誘拐したテロリストたちを許すわけにはいかないのだ」

大使の眼から涙がこぼれた。

「かならず、息子さんを無事、ここにお連れしますわ」

ジャンは決意に満ちた眼差しで答えた。

ドアが開き、ブルーのスーツ姿の若い美女が入ってきた。黒髪に、浅黒い肌。

「大使閣下。ファイルをお持ちしました」

美女はファイルを大使のデスクに置き、部屋を出ていった。

「彼女はソフィア。トルコ系アメリカ人だ。信頼できる」

美女の去った後に視線を向けたジャンに、大使は言い、ファイルを開いた。

「これが息子に関するファイルだ」

ジャックとともに部屋を出たジャンは、「ちよっと待ってて」とトイレに向かった。

トイレのドアを開けると、ちょうど、さきほどのソフィアという女秘書が用を終えて出てくるところだった。

ソフィアは、艶めかしい微笑みを浮かべ、ちよっと礼をしてトイレを出ていった。

ジャンは、彼女が使った便器にふと目を向け、しばし見つめた。

「豪勢じゃないの、ここ！」

十人は悠々と入れる広いバスタブの泡をはねあげながら、キャシーが歓声をあげた。

「中東も思ったより、いいところね！」

コンチネンタル・ホテルは、この国でいちばん、五つ星だった。六人の女たちは、最高級の一部屋を与えられた。さっそく埃まみれの服を脱ぎ捨てた美女たちは、まっさきにバスタブに飛び込んだのだ。

美女たちは、冷たいビールを飲みながら泡風呂で汗を流した。

「残念なのは、男つけがまったくないことね」

モーリーンが言った。ティナが冷やかした。

「あんた、禁欲生活の最長記録は何日？」

モーリーンは微笑んだ。

「何時間って聞いて」

「イスラムは性的な戒律が厳しいのよ」  
ローレンが言った。

「肌を出して歩いてる女性がいらないでしょう。だから、私たちの肉体そのものが武器になるってわけ。とくに、キャシーは」

いきなりローレンに1メートルの乳房をつかまれ、キャシーは「きゃっ」と悲鳴をあげ、「やっつたな」とお湯を浴びせた。

そのとき、浴室の電話のベルが鳴った。

「あら、誰かな」

リサが呟いた。

「男かも」

ティナがくすくす笑った。リサが応じた。

「イタ電？」

「任務じゃないことを祈るわ」

ジャンが言いながら、バスタブを出て、豊かな胸を揺らしながら受話器をとった。

「はい……朝五時？」

女たちが黙った。

「ガマラ……綴りは……敵は三十人……分かった……ジープ？ 裏口から……オーケー」

ジャンは受話器を置いて、美女たちに向き直った。

「残念、デートのお誘いじゃなかったわ」

翌朝。

砂漠の真ん中を一台のジープが突っ走っていた。乗っているのは、黒いブーツ、グリーンの上トパンツ、白いスポーツブラ、そして赤いベレー帽の六人の金髪美女たち。

機関銃を手に、彼女たちは緊張の面持ちで、目的地へと向かっていた。

古ぼけたイスラム様式の城塞が、まだ明けきらない薄闇のなかに聳えていた。

ジープは、そこから一キロ離れた地点で停車した。女たちは一斉にジープを降りて走り出した。

城門をくぐり、長い螺旋の石段を昇った。入口は、石段を昇りつめたテラスの奥にあった。入口に見張りの兵士が二人、煙草をふかしながら談笑していた。

女たちは、二手に分かれた。足音を忍ばせて左右から、兵士たちに近づいた。

一人の美女が、背後から兵士の喉に腕をからませた。一人が、股間を蹴り上げた。兵士たちは呻いて石床に這いつくばった。一人が、その脛骨を踏み折った。

六人は、機関銃の安全装置を外し、入口から潜入した。

兵士たちの宿舎は、入口の階段を降りた一階にあった。何人かはまだ二段に組まれたベッドに寝そべり、何人かはトランプをし、何人かは洗面器に組んだ水で顔を洗っていた。みな、軍服にターバンを巻いている。

カギ穴をのぞいていたジャンは、背後を振り返り、頷いた。女たちは、機関銃を水平に構えた。

ドアが開けられた。兵士たちはいつせいにその方向を見た。銃声が炸裂した。

たちまち、兵士たちの半数は血にまみれて倒れた。兵士たちはうろたえ、壁に立て掛けてあった銃に飛びつこうとした。だが、背中に銃弾を浴び、悲鳴をあげて倒れた。

それでも二人ほど、銃弾をかくぐり、部屋の奥の扉にとりついた。だが、彼らもまた、蜂の巣になって倒れた。

硝煙が部屋中に漂い、血の匂いがたちこめた。わずか十数秒で、二十数名のアラブ人たちは死骸になった。

「いくよ！」

ジャンは合図した。二人の兵士の死体を蹴飛ばし、扉を開けた。

隣室はがらんだ。その奥にさらにドアがあった。

ジャンはうなずいた。美女たちはそのドアに向かって歩き出した。

そのとき、壁の一面が四角く切り取られた。隠し部屋だった。ナイフを構えた五人の兵士たちが飛びかかってきた。

不意を撃たれた美女たちは、機関銃を奪い取られた。肉弾戦が始まった。髭面の浅黒い兵士たちが、金髪で透き通るような美女たちと、一対一の組み打ちとなった。

キャシーは、背後からいきなり乳房をつかまれた。

「何するのよ！」

掌からはみ出しそうな豊満で柔らかな膨らみに、かえってアラブ兵がとまどったように動きをとめた。すかさずキャシーは踵を後ろにはねあげた。

「ううっ！」

踵はアラブ兵の股間を直撃した。アラブ兵は体を折った。キャシーは反転し、その鼻柱に膝蹴りを浴びせた。アラブ兵は顔を抑え、床に這いつくばった。キャシーは、その後頭部に拳をたたき込んだ。

リサは、左右の手を突き出し、アラブ兵と力くらべの態勢にあった。

「ちつくしよ」

リサは醜悪な敵の顔に唾をはきかけた。アラブ兵は眼を剥き、腕をねじあげるようにおろした。

さすがの彼女も、力では男にはかなわない。

ナイフが……ナイフが使えれば……。それは、腰にぶらさがったままだった。

ついにリサは、壁に押しつけられた。アラブ兵の臭い息がふきかかった。

「野郎！」

リサは渾身の力を振り絞り、膝を蹴りあげた。膝頭に股間を直撃した。

「ぐふっ！」

アラブ兵は眼を見開いた。力が抜けた。

「食らえ！」

リサは敵の鼻柱に頭突きを喰わせた。アラブ兵の体が離れた。

リサはすかさずナイフを抜き、敵の懐に飛び込んだ。

アラブ兵の体が硬直した。ナイフは肋骨の真下から肉を抉り、心臓に到達していた。

モーリーンは敵に突き飛ばされ、床に尻餅をついた。

アラブ兵は鬼のような形相で、つかみかかろうとした。

「やめて〜！」

モーリーンは咄嗟に、スポーツブラをたくしあげた。飛び出した乳房に、アラブ兵は眼を見開いた。そのスキを逃さず、モーリーンは長い脚を突き上げた。踵が兵の股間に命中し、腰ごと空

中にもちあげた。

「ぐっ！」

アラブ兵は着地すると両手で股間を抑えて床に突っ伏した。モーリーンは立ち上がり、すばやく機関銃を拾い上げ、銃弾を浴びせた。アラブ兵の体が飛び跳ね、やがて動かなくなった。

「ふう」

モーリーンは汗を拭った。

「キャシーの真似してみたけど……これ、使えるわね」

ローレンは、アラブ兵に床に組み敷かれていた。

なんとか膝で股間を蹴り上げようとしたが、相手は両足で彼女の膝を抑えつけ、動けないようにしていた。ローレンは、両手で相手の両手首をつかみ、敵が振り下ろそうとするナイフの攻撃を必死で食い止めた。だが、力の差は歴然だった。

ついに、ローレンの左の手の力が抜けた。敵はナイフを持つ右手をふりあげた。

「きゃっ！」

ローレンは思わず眼をつぶり、顔を動かした。その鼻先にトンとナイフの切っ先がテーブルに突き立った。

「あ！」

眼を開いたローレンは、敵のナイフの一撃を避けたことを察知した。敵は第二撃を浴びせるべく、ナイフを引き抜こうとうしていた。

ローレンは自由な左手をすばやく動かした。ベルトに装着したダーツを引き抜き、敵の右目を突いた。

「ぎゃあああああ！」

アラブ兵は悲痛な叫びをあげ、血が吹き出す眼に両手をあてがい、のけぞった。

ローレンはするりと敵の体の下から抜け出し、腕時計のボタンを押した。

アラブ兵の頭部が半分吹っ飛んだ。

ティナは、小柄なアラブ兵と対峙した。ナイフを構え、姿勢を低くした敏捷な男は、何度もナイフを突き出し、切っ先があやうくティナの白い肌をかすめた。

「ナイフじゃ、勝負にはならないわね」

ティナは眩き、ナイフを捨てた。敵は一瞬、たじろいだが、すぐにニヤツと笑い、ナイフを突き出した。

ティナはさっと姿勢を低くしてナイフをかわし、同時にスライディングするように下半身を地面につけ、思い切り脚をのばした。

ティナの長い脚が、男の右足首をはらった。男はつんのめった。ティナは男の胸ぐらをつかみ、

巴投げを喰わせた。男は空中で回転し、したたかに床に背中を打った。

苦しげにうめく男の股間を、ティナは思い切り踵で踏みつけた。

「ぎゃあああ！」

男は絶叫し、腰を引くようにして体を折った。ティナは容赦なく、そのまま睾丸を踏みつぶした。男は血反吐をはいて意識を失った。

「あんたなんか、素手で十分よ」

ティナは男の髭面に唾をはき、それから喉笛を踏みつぶした。

その頃、ジャンは一人部屋を出て、奥の扉を開けた。そこはテラスになっていて、裏門に通じる石段を、数名のアラブ兵が駆け降りていた。

「一人も生かしてはおかないわよ」

ジャンは、彼らの背中に銃弾を浴びせた。たちまち兵士たちは血だるまになって石段を転がり落ちた。

「呆気なかったわね」

再びジープを走らせながら、キャシーが興奮したように叫んだ。

「ロスのストリードギャングのほうか、まだ骨があったわ」

リサはパチンと指を鳴らしてうそぶいた。

「それにしても……」

ローレンが言った。

「大使の息子さん、いなかったわね」

「すでにどこかに移送されたのかも」

ティナが言った。モーリーンが肩をすくめた。

「やれやれ、とんだ無駄骨ね」

「よしなさい、モーリーン」

ジャンがハンドルを握りながらたしなめた。

「敵のアジトを一つ潰したと思えばいいわ」

ホテルに戻った美女たちは、ぐったりとソファに腰をおろした。

「ああ、眠い……お風呂に入って、寝ましょう。夜はステージよ」

モーリーンはブーツを脱ぎ捨てながら言った。ティナはすでに瞼を半分閉じかけていた。

「そうね。誰か、お湯入れてきて……」

そのとき、電話のベルが鳴った。ジャンがとりあげた。

「はい……ええ、息子さんはいなかったわ……そう全部で三十五名……生存者なし……次の場所

は？……分かった。朝五時ね」

ジャンは電話を切り、すでに下着姿になった美女たちに向かって言った。

「明日朝五時、出動よ」

「朝五時？」

ティナが言った。

「ステージは十二時までよ。三時間くらいしか寝られないわ」

「ステージはキャンセルさせてもらうわ。理由は私が考える」

「スリリングだけど……」

リサが言った。

「ラクな仕事じゃないわね」

「それが兵士の任務よ」

ジャンはスポーツブラを脱ぎ捨てながら言った。

「全ては……お国のため！」